

## メッセージアウトライン コロサイ人への手紙 1:25~29 「奥義であるキリスト」

[25]「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです」

パウロのこの務めは神からゆだねられたものであった。あのダマスコ途上で復活のキリストに出会って以来、彼はキリストのしもべとして教会に仕えるものとされたのである。それは具体的には「神のことばを余すところなく伝えるため」であった。

[26]「これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現わされた奥義なのです」

「奥義(ムステーション)」とは測り知ることのできない神の思いのうちに秘められているものを意味するが、それが時至って神の聖徒(クリスチャン)たちに啓示され現されたのであり、それは神の救いに関することであった。イスラエル人にとってそれは自分たちだけに関わることであって、異邦人たちがその救いに含まれるとは理解しなかった。しかし、時至ってこの救いの奥義が明らかにされたのである。

[27]「神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあるとどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです」

この救いの奥義にはイスラエル人だけではなく異邦人も、つまり全世界すべての人々が含まれており、パウロはそのことを今、異邦人の間にあると宣べ伝えている。これは今まで罪と滅びの暗黒の中にいた異邦人たちにとっては栄光に富んだ知らせであり、その中心はキリストである。そしてこのキリストを救い主と信じ受け入れる者はキリストがその人のうちに住んでくださる。

→黙示録3:20、ローマ8:10

今やイエス・キリストを信じる者はイスラエル人も異邦人も、どのような民族も、どのような人々も無条件で救いに入れられる。→ガラテヤ3:26~28 律法を固く守ることや様々な儀式、修行などによって救われるのではない。それは誰にもできないことである。→ローマ3:19~24

もはやユダヤ人も異邦人もなく、キリストがすべての人にとって救いとなってくださったのであり、条件はただこのイエス・キリストの救いを受けるか否かである。

パウロがここでキリストのことを「栄光の望み」と言っているのは、今の時のキリストの内住がやがて世の終わりの日にクリスチャンが受けるすばらしい栄光の保証であるという意味である。

[28]「私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです」

ここでは「あらゆる人」「すべての人」という表現が繰り返されているが、それ

は当時のグノーシス哲学にもとづいた異端が、救いを得るのは一部のエリートに限られると教えていたことに対抗するためでもあったのであろう。パウロはキリストを宣べ伝え、それによって数われた人々に対して、戒めることと教えることとによって成長させようとしている。しかも彼は知恵を尽くしてそのようにしている。頭ごなしに叱るのではなく、知恵をもって戒めるのである。知恵を尽くして戒め、教える。そのようにしていくと人は健全に成長していくのである。このようにしてパウロはすべてのクリスチャンたちをキリストにある成人として立たせることを目標にしている。彼はやがて主イエス・キリストが再び天から来られる時には、彼らが責められるところのない、信仰にも知識にも成熟した成人としてキリストの御前に立てるようにと励んでいるのである。

[29]「このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています」

28節では「私たち」と複数で働き人全員の立場で語られていたが、ここでは「私」とパウロ個人の心構えが表されている。パウロは有能な人であり、知識も行動力もあった。しかし彼のうちに力強く働くキリストの力がなかったならば、彼は何もなしえなかったことだろう。このキリストの力によって彼は労苦しながらも、福音のために奮闘することができたのである。

私たちも自分の内を見るならば何も誇れるものもないが、しかしパウロ同様に私たちもまた自分のうちに力強く働かれるキリストの力によって神のために奉仕することができる。私たちにもそれぞれ与えられた役目があるはずである。それぞれがその置かれた立場で福音のため、キリストのため、教会のために労苦しながらも奮闘するものとなりたい。